



# すぎの木通信

2021年11月22日(月) No. 141

発行：特定非営利活動法人しさわ  
就労継続支援B型 ワークプラザすぎの木  
宍粟すぎの木家族会  
☎ 0790-65-0170 FAX 65-0177  
〒671-2506 宍粟市山崎町宇野 319 番地

## 『精神科病院×新型コロナ』の感想文を寄せていただきました。

“偏見や差別をもつ人をリーダーにはいけない”

新型コロナ感染症が世界中に大きなパラダイム(物の見方や捉え方)変化をもたらしています。コロナ感染症が収束すれば私達の世界はどのように変化していくのでしょうか？産業革命以降、人類は進歩という名の下で便利さを追求し、そして欲望を満たす為に数多くの戦争を繰り返してきました。

また、近代化の原動力になった化石燃料が地球の温暖化を進め、それによって深刻な自然災害が多発しています。弱者を切り捨て、無視をして、自己の欲望を満たそうとしても人の心は決して満たされないのです。コロナ禍における精神病棟に入院している患者は弱者であり、その人達を行政がそして保健所が見て見ぬふりを続けている現状をNHKのETV特集は伝えていました。日本精神科病院協会の会長は、精神科病院の役割は「治療と社会秩序の担保」と言い放っていたことに、私は憤りを感じました。また、統合失調症で入院されている人に優しく声をかける医師の笑顔に、急に落ち着きを取り戻された入院患者さんを見て、全ては自分の映し鏡であると思いました。

私は人間として大切な「利他の心」「いつくしみの心」を忘れないようにしたいと思うとともに、このような厳しい現実があることが大変残念に思いました。

大砂 彰

上垣さんならではの思いが伝わりました。

コロナ禍の中で、改めて精神科病院の奥深い、根深い問題を突き付けられました。身近では、今、すぎの木家族会の存在が難しい状況です。上垣さんを通して家族会の大切さを感じていますが、立ち向かう相手にはあまりに大きくつかみどころが無いように思いました。病院長の言葉に「自分の事として考えたくないから」故だとありましたが、そこから解決を始めるには遠い道のりです。

退院後の障害のある方を受け入れる、社会のシステム作りが早くできることを期待します。

NPO 法人しさわ 竹添和子

この放映で今まで想像もしていなかった(それまで多くの住民に現状を知らされてなかった為、知る由がなかった)精神科病院での収容実態が明らかにされました。これだけ公に放映されたのですから、今まで通りと言うわけにはいかないでしょう。日本の全ての精神科病院がこのような悪質な非人道的な機関であるとは思えません。日本精神科病院協会の会長が、治療に加えて社会秩序の担保である。とまで言い切っておられるので、改善をする必要がありながら、色々な苦難のため手が付けられず今まで来てしまったのかと思えます。命と引き換えに地球規模で拡大したコロナのおかげで隠れていたものが見えてきたと思います。病院の経営面は勿論、医療、福祉、保健、地域住民、職場、精神科領域に関する者、家族、その他すべての人間に対して投げかけられた事象だと思います。誰が悪いと矛先を向けるのではなく、令和の今を生きる全ての人間に対して、人間の尊厳に焦点を当て損得を考えないで真摯に向き合えと言われているように感じました。病状には段階があるので一括では考えられないでしょうが、明らかに入院をしなくても何らかの支えがあれば生きられる方たちが人間らしく生を全うできる環境が作られるよう政治的観点からの早急な改善を要望します。弱者にしわ寄せがくるのは悲しいことです。誰もわが子や家族が大切なように、同じ時を生きている人を幸せに出来る人間を作ることが大切です。どんなに地位や名誉があっても富を有している者であってもコロナは人を選ばず感染していくように、精神疾患も人を選ばず罹患します。薬の力で症状は軽減できたとしても一度傷ついた心が元通りになることは至難の技です。私たちの役割として直接手を出して何かを変えることはできなくても、皆と一緒に輪の中に

誘って出来ることをしてもらえよう受け入れられる一人になることが大切だと思いました。

ワークプラザすぎの木 支援員 保杉弘美

精神科病院(x病院y病院)の実態を知り大変驚きました。又、精神科病院の医師・看護師さんの数が一般病院より少なくないという事にもおかしいなと思いました。精神を病んでいる人達には、本当に心やさしく根気強く接することが大切ではないでしょうか。それには一般の病人より、医師、看護師さんが多いのが普通ではないでしょうか。それに一部屋に何人も入室させ、コロナが流行しても患者とそうでない人と同室させたり、今でもそんな病院があることに更に驚きました。そんな病院に30年以上入院されている方もあるとか。誰がいつ精神異常がおきるかわからない世の中、不安が募りました。

すぎの木家族会員 濱田婦美子

コロナ禍で逼迫した医療現場、それでも相手の立場になって考え行動する、これは基本です。精神医療に携わる最高の立場にある会長の発言はあきらかに差別。この言葉に保健所や警察の方はどのように思われたのでしょうか？一番苦しみ悩んでいるのは当事者本人です。

NPO 法人しさわ 衣笠千代子

---

兵庫県社協を通じて長谷川福祉財団より危険箇所改修工事の助成をしていただきました。

---

施設内の危険箇所を調査し、11月初旬に改修工事を行いました。当作業所開設当時にバリアフリー化リホームをしていましたが、就労継続支援 B 型になってから約10年を経過するうちに、改善すべき箇所も多くなってきました。改修工事後、利用者さんから良くなって助かったとの声を頂いています。



---

生活訓練事業として加藤智子講師を迎えて11月2日に「楽しい体操」を実施しました。

---

11月より、これまでと違った形で生活訓練事業を実施することになりました。今回は、椅子に座ってできる体操をしました。すぎの木始めて以来の、27名の参加数でした。約60分の体操でしたが、参加者はあっという間に終わった感じでした。今の利用者のニーズをしっかりと捕まえて、今後も色々な訓練を実施していきます。



**編集後記**： 宍粟すぎの木家族会と NPO 法人しさわの合同研修会の感想文を寄稿されました方々、貴重なご意見本当にありがとうございました。障がい者を取り巻く環境は、まだまだこれからの様に思われます。改修工事で少しの手すりを付けただけでも、障害者にとっては非常に大きな変化だったようです。今後も、聞こえぬ声に耳を傾けて、より良い支援をしていきたいと職員一同思っています。(赤)